別所弥八郎と
アジア・太平洋戦争末期の「報道写真」
――大陸打通作戦従軍関連写真を中心に――

井　上　祐　子*

目　　次

はじめに
第１章　大陸打通作戦をめぐる報道・宣伝の状況
第２章　別所弥八郎の従軍の経緯と従軍関連写真の概要
第３章　別所弥八郎従軍関連写真の特徴と意義
おわりに

はじめに

日中戦争期からアジア・太平洋戦争期にかけて，あらゆるメディアが戦争に動員された。写真もまた例外ではなかった。戦時下の写真は，国内に向けては，国策を知らせ，あるべき国民像を視覚化し，海外に向けては，日本の力を誇示し，大東亜共栄圏構想を喧伝する「“国策”報道写真」が主流となっていく[1)]。

しかしその一方で，アジア・太平洋戦争末期には，戦争のもたらす悲惨な現実を写し出した「報道写真」も現れてくる。東方社から派遣されて大陸打通作戦（一号作戦）に従軍した別所弥八郎（1917～1991）が撮影した写真もその一つである。

東方社（1941年春創立）は，陸軍参謀本部傘下で，大判のグラフ雑誌

＊　いのうえ・ゆうこ　京都外国語大学非常勤講師

『FRONT』など海外向けの写真宣伝物を制作していた団体である。東方社については，同社の美術部員であった多川精一がその研究に先鞭をつけ，以後『FRONT』のグラフィックワークや編集に関するものが研究の中心となってきた[2)]。その一方で，写真部に関しては関心が薄く，研究は遅れている。その理由としては，『FRONT』以外の資料に乏しいことや，写真史研究が有名写真家の研究を中心にしてきたことなどがあろう。東方社の写真部長は木村伊兵衛であり，初期には濱谷浩が在籍していたが，その他には巷間に広く知られるような有名写真家はいない。

しかし，このたび旧東方社社屋に保管されていた同社のネガフィルムが発見され，2011年に東京大空襲・戦災資料センターに寄贈された[3)]。東方社では，戦後，制作物類は焼却した[4)]が，ネガはできるだけ撮影者に返却したという[5)]。旧社屋に保管されていたものは，何らかの理由で，撮影者に返却されずに残ったものと思われる。全部で17000点ほどになるが，その中には，陸軍関係の学校や海外取材で撮影したもの，東京空襲の被害を写したものなどがある。別所の大陸打通作戦従軍時の写真ネガも，一部がその中に含まれていた。

別所は，戦後，横浜空襲を撮影した写真家，あるいは桂林の戦いでの毒ガス使用を証言する写真家としてメディアにとりあげられることもあった[6)]。また，1990年には札幌市で写真展も開催しており，その際に写真集『ある従軍カメラマンの証言』（コープさっぽろ）を刊行している。しかしながら，別所は，当時の肩書を主に陸軍報道班員としており，東方社の社員であったことはあまり公にしていない[7)]。多川精一の著作類に出てこないこともあり，別所の存在は東方社研究では見落とされてきたが，別所の写真は，東方社研究においても，写真史研究においても重要な資料である。

ネガは，何らかの媒体に掲載される前の撮影者の意識がそのままに映し出されたものであり，新聞・雑誌等に掲載された「報道写真」と単純に比較することはできない。しかし，対象となる事物を伝えるために撮影した写真のネガは，「報道写真」につながるものであり，「報道写真」に含めて

考えることは可能であろう。

本稿においては，別所の大陸打通作戦従軍関連写真（以下，従軍関連写真と略称）の特徴と意義を明らかにすると共に，敗色が濃くなるアジア・太平洋戦争末期の「報道写真」についても考えていきたい。なお，別所の写真の中には大陸打通作戦に直接関係しないものも含まれているが，本稿では，同作戦従軍時に撮影したと考えられる写真すべてを従軍関連写真として考察の対象とした。

第１章　大陸打通作戦をめぐる報道・宣伝の状況

大陸打通作戦は，「日本本土空襲の恐れがある在支米空軍基地を覆滅するとともに，中支から仏印に至る大陸交通路を打通するために」行われた「日本陸軍史上最大の作戦[8)]」であった。1944年４月に始まり，京漢作戦（北京～漢口，44年４月～５月），湘桂作戦第１段階（漢口～衡陽，44年５月～８月），同第２段階（衡陽～仏印及び南部粤漢線（広東～衡陽），44年９月～45年２月）の３段階に分けられる。別所が従軍したのは，最後の湘桂作戦第２段階である。本章では，別所の従軍関連写真の位置づけを考えるため，まず別所が従軍した湘桂作戦第２段階時期を中心に，同作戦に関わる報道・宣伝全般についてまとめておきたい。

第１節　大陸打通作戦の報道と在華米空軍に関する解説

中国戦線は，アジア・太平洋戦争開戦以来，支作戦場となっていたため，全般的に関心は低かった。しかし，「日本陸軍史上最大の作戦」であった大陸打通作戦については，当初，報道は多かった。長沙の占領（6.18）は，直前の米軍のサイパン島上陸作戦開始（6.15）及び北九州への初空襲（6.16）によって注目度が低くなったが，重慶軍の頑強な抵抗に遭い，三度目の総攻撃でようやく陥落させた衡陽の戦い（8.8占領）の記事は多い。

当該期においても，新聞では，写真は少ないものの，各地の攻略・占領を報じるほか，作戦軍の前進についても折にふれて掲載している。桂林・柳州の戦闘・占領（11.10）については，占領前後に大きく報道された。しかし，すでにフィリピン決戦が始まり，特攻隊も出撃していた上，11月24日以降はマリアナ諸島からの本土空襲が始まり，それらの方がより重要なニュースとなっていた。

『写真週報』や『アサヒグラフ』などのグラフ雑誌では，衡陽の陥落をやや大きく取り上げている程度で，各地の占領報道は少ない。しかしそれでも，「大陸戦線二三五〇キロ　在支米空軍基地覆滅の運命」（『アサヒグラフ』44.7.19）や「大陸でも戦果を拡大」（『写真週報』344号　44.10.25），「大陸分断作戦の全貌」（『アサヒグラフ』44.11.8）などのように，戦況をまとめて知らせ，解説するような記事はいくつか掲載されている。それらの記事には，行軍や戦闘準備の様子あるいは現地住民が鉄道復旧工事などを行っている写真がつけられていた。

このように，この時期にも中国戦線は報道の主役ではなかったが，先の『アサヒグラフ』（44.7.19）の記事のタイトルにも見られるように，在華米空軍（米陸軍第14航空軍）[9] に対する関心は高かった。在華米空軍については，「世界情勢判断」（43.9.25）においても，「在支米空軍ハ漸次増強ノ趨勢ニ在ルヲ以テ之カ活動ハ軽視ヲ許ササルヘシ[10]」とされていた。

当時すでに中国の制空権を握っていた米空軍は，昆明を本拠地，桂林・衡陽などを前進基地として，揚子江沿岸や広東・香港，東シナ海などへの空襲を繰り返していた。米空軍は，陸上輸送機関や船舶を集中的に狙い[11]，日本軍の補給に大きな損害を与えた。大陸打通作戦により，米空軍は基地の移動を余儀なくされたが，桂林・柳州撤退後も，芷江や遂川などの飛行場から空襲を継続していた[12]。米空軍の空襲によって，日本軍は，「昼間は休止して夜間の作戦行動しかできない状況[13]」に追い込まれたばかりでなく，作戦部隊も後方部隊も「惨憺たる地獄図絵を現出[14]」することになった。

在華米空軍は，このように現地日本軍を苦しめていたのだが，日本国内のメディアが注目していたのは，それよりもむしろ，B29を含む日本本土への空襲の可能性であった。B29は，第20爆撃集団に配備・運用されていたため，第14航空軍とは指揮命令系統が異なるが，両者を合わせ，中国での航空戦や各基地の状況，B29の配備情報などを踏まえ，どこの基地からどのような編隊でやってくるのかなどを分析・解説している[15)]。

在華米空軍の覆滅は大陸打通作戦の主目的の一つであったが，国内においては，作戦そのものよりも本土空襲への関心の方が大きく，グラフ雑誌などでは，戦況はそれと共に報じられる傾向にあった。しかし，マリアナ諸島からの空襲の開始は，在華米空軍による対日空襲の必要性と大陸打通作戦の最大の目的を失わせたのであり，それ以降，そのような記事もなくなっていく。

第2節　在華米空軍の空襲による中国人犠牲者

在華米空軍については，対日空襲に関連するもののほかに，米空軍の空襲の犠牲となった重慶軍兵士や一般市民をとりあげた記事もあった。

「米空軍，重慶軍を爆撃」（『朝日新聞』以下すべて東京版　44.7.29）では，在華米空軍が「重慶軍陣地に多数の爆弾を投下し死傷者多数を生ぜしめた」と報じており，また，「敗走の蔣軍を米空軍が殲滅」（『読売報知』45.1.28）では，1944年12月の日本軍の貴州省突入により退却しようとした重慶軍が，「これを督戦せんとする米空軍の銃爆撃によって完全に覆滅」されたとしている。『アサヒグラフ』（44.8.30）にも，衡陽陥落の8月8日に「白旗を掲げてわれに投降して来る重慶兵に対し，折柄飛来した米機が，投降兵目がけて銃爆撃を加へた」という記事（「衡陽周辺の米蔣軍に鐵槌」）がある。

1944年7月に発足した小磯内閣では，「米英人ノ残忍性ヲ実例ヲ挙ゲテ示シ殊ニ今次戦争ニ於ケル彼等ノ暴虐ナル行為ヲ暴露ス[16)]」ることで，

敵愾心を高揚させようとしていた。前述の記事は，在華米空軍の残忍性・非人道性を知らせるものであり，政府の方針に見合うものであったといえよう。また，重慶政権に対する宣伝方針としては，米中の離間がうたわれており[17]，在華米空軍の重慶軍への銃爆撃は，対中国宣伝にも利用できたと思われる。

前述のように，在華米空軍は日本の交通機関などへの空襲を繰り返していたが，早くから一般市民にも犠牲が出ており，新聞でも「米機，広東を盲爆　暴虐無辜の住民殺傷」（『朝日新聞』43.5.10）などと報じられていた。当該期においても，中国各地への空襲の記事がいくつも掲載されている。その中には，湖南省道縣で爆弾，焼夷弾と共に「セルロイド製の焼夷カード数千枚を撒布し」，中国人多数を殺傷した上，市街地及び附近の田畑までも焼く「悪魔的戦術」をとったという記事（「敵焼夷カード撒布」『朝日新聞』44.9.25）や，「軍事施設皆無の市内華人街を盲爆し，多数の死傷者を出」し，「赤十字病院を始め，学校，旅館その他を爆砕」した（「敵機広東地区を盲爆」同44.10.5），あるいは「香港華人住宅区域に盲爆を敢てし華人四千余名を殺傷するの非人道行為に出た」（「四千余名死傷　敵，香港を盲爆」同45.1.23）など，米空軍による無差別爆撃の非人道性を強調するものもあった。

新聞では記事自体も小さく，写真もないが，『アサヒグラフ』（44.10.4）の「重慶はアメリカから何を得たか―その哀訴に報いるこの暴虐」という記事では，米空軍の空襲を受け，がれきの中に佇む子供やがれきの片づけをしているらしい女性などをとらえた写真も掲載されている。そして，記事の中で「対日抗戦の第一戦に立つ重慶兵には，傍若無人な米兵の督戦隊が監視の目をはなさない。在支米空軍はその翼を連ねて，日本軍陣地を爆撃する代りに，無辜の民衆に殺戮の爆撃を浴せかける」と米空軍を批判している。

日中戦争期には，アメリカ側が日本軍の対中攻撃・空襲を批判していた。米グラフ誌『LIFE』には，日本の攻撃や空襲による中国人の死傷者

や死者の前で涙する家族の写真などを掲載して，日本を批判する記事が散見される[18)]。アメリカやイギリスの「宣伝の主要な特徴は事実に根ざした宣伝にあった[19)]」が，これらの記事は，悲惨な現実を伝えることで，内外の世論をひきつけた。

「重慶はアメリカから何を得たか」は，米空軍の空襲による被害や惨状の写真を付して反米宣伝を展開しようとしたもので，米英の宣伝手法に通じる。守勢に回ることで，日本のメディアにも，このような記事が掲載されることになったわけだが，『アサヒグラフ』の写真は，『LIFE』の写真ほど強い印象を与えるものではなく，敵愾心の高揚を期待できるほどのものではないように思われる。

日本政府は，敵愾心の高揚を図ってはいたが，一方で記事や写真に対しては厳しい取り締まりを行っていた[20)]。日本のメディアに死傷者の写真が掲載されていないのは，それが禁止されていたからである。空襲に関する記事及び写真については，「陸海軍省令による検閲を受くるの外，左記例示の如く事実を誇張し又は刺戟的に亘らざるよう記事編輯上注意ありたし」とされ，具体例が挙げられていた。その中に「死者又は傷者の運搬状況に関する写真」，「死体写真」，「罹災者の狼狽状況」などがある[21)]。

このように，日本では現実の被害写真を載せること自体を制限していたのであり，宣伝という観点からすれば，取締りの厳しさがその効果を限定的なものにしてしまったように思われる。しかし，「重慶はアメリカから何を得たか」に掲載された写真は，戦局が不利になる中で，日本においても現実の惨状をとらえた「報道写真」が現れてきたことを示す一例といえるだろう。

第3節　日本軍の戦闘・行軍・占領に関する写真

前述のように，当該期においては，大陸打通作戦の写真が新聞に掲載されることは少なかった。例えば，報道班員が撮影した桂林占領関係の写真

が『朝日新聞』に最初に載ったのは，11月23日（「桂林で鹵獲した重慶軍の機関車」飯島報道班員）であったが，以後12月27日に「米機の盲爆に廃墟と化した市街に突入」（加藤報道班員）と別所が撮影した「在支米空軍が使用した桂林飛行場の洞窟格納庫」が掲載されるまで，同紙に大陸打通作戦の写真の掲載はない[22)]。なお，別所の写真には，もう一枚『読売報知』に掲載されたものがある（「わが軍に爆砕された桂林飛行場の敵機残骸」45.1.14）。

別所の写真のうち，前者は洞窟格納庫の並外れた巨大さを，後者は爆撃の激しさを伝えるものではあるが，どちらも静的な写真である。また，加藤の写真は，徹底的に破壊された廃墟の中を数人の兵士たちが歩いていく後ろ姿をとらえたものだが，「突入」という言葉の勇ましさとは裏腹に，もの悲しく，気味悪ささえ感じられる写真である。「広西の峻嶮を望み悪路を衝いて進撃する皇軍」（『読売報知』44.11.21　飯島報道班員）も，水たまりの見える道を三々五々歩いていく兵士たちを写したもので，あまり力強いものではない。

行軍の写真は日中戦争期から多いが，日中戦争期のものは，現実の苦難を写し出す一方で力強さもあり，日中戦争の「義」のシンボルともなった[23)]。また，占領に際しては，威勢のよい万歳写真が撮られた。大陸打通作戦でも，重慶軍との地上戦では勝利をおさめ，打通そのものは成功した[24)]。けれども，当該期の行軍や進駐の写真には，万歳写真はなく，また，それほどの困難さも見受けられず，力強さや覇気も感じられなくなっている。

とはいえ，必ずしもすべての写真に，勇ましさや力強さがなかったわけではない。『毎日新聞』（東京版・大阪版），『読売報知』（すべて44.11.23）および『アサヒグラフ』（44.12.20,「追ひ詰められた重慶」）に掲載された加藤報道班員の「桂林郊外の民家に立篭る頑敵を手榴弾にて攻撃」（『毎日新聞』東京版タイトル，他のタイトルはそれぞれ若干異なる）は，銃を手に半身を起して前方を窺う兵士が手前にあり，中景の二人の兵士が大き

な民家に向かって，手榴弾を投げつけようとする瞬間をとらえたもので，戦闘の緊迫感を感じさせる。しかしながら，この写真には，演出写真の可能性もあるように思われる。

大陸打通作戦には，前述の二つの主目的のほかに，国民の士気高揚も考えられていた[25)]。しかし，現実には，報道班員が「前線へ行っても追払はれてい丶ものが写せない[26)]」という状態であり，戦闘の写真を撮ることは難しかった。そのために報道班員たちは，例えば「「今朝の柳州突入をもう一度再現して欲しい」」と兵士たちに頼み，「敵の弾丸がとんでこなくなってから，それらしい格好をさせて写真をとる[27)]」ことも行っていた。求められるものと現実に撮影できるものの間には乖離があったのであり，演出写真も必要とされていた。

前述のように，大陸打通作戦において日本軍は，地上戦では勝ちながらも，米空軍に苦しめられていた。日本軍将兵を撮影した写真にも，その両面が反映されているように思われる。一方では，演出であったかもしれないが，地上戦での迫力ある攻撃の様子を伝え，士気高揚に資するような写真もあった。しかし他方，将兵たちの周りにある悲惨な現実や覇気のなさを写し込んだ写真もあった。特攻隊の写真においても，一方では勇ましいものもあったが，「戦友の遺骨抱いて出撃する萬朶隊勇士」（『毎日新聞』東京版（大阪版はタイトルが異なる）44.11.16）などは，もの悲しい写真である。廃墟の中を進む写真や苦境の中で士気の上がらない様子の兵士たちをとらえた写真も，前節で述べた空襲被害の写真同様，戦局が悪化する戦争末期の現実の惨状をとらえた「報道写真」の一つといえるのではないだろうか。

第２章　別所弥八郎の従軍の経緯と従軍関連写真の概要

本章では，別所が従軍するに至る経緯・背景を整理し，従軍時の別所の足取りを追いながら，従軍関連写真の概要について述べていきたい。

第１節　別所弥八郎の経歴と従軍の経緯

別所弥八郎は，1917年北海道白老町に生まれた[28)]。父の死に伴い５歳のときにサハリンに渡り，小学校卒業後，同地の写真館に勤め，その後自ら写真館を開業したようである。写真館経営時代にオリエンタル写真工業株式会社社長菊地東陽の知遇を得，1937年に上京して同社で働き始める。しかし，翌38年に同社の取引先であった松竹大船撮影所にスチールカメラマンとして入社し，さらに43年には東宝映画株式会社に移籍する。おそらくその年に教育召集を受けたものと思われるが，除隊後，自ら願い出て東方社に入社する[29)]。東方社でも徴兵され戦地に赴いたものもあったのだが，別所は，徴兵の可能性がより少なくなるように，陸軍と関係のある東方社への入社を決めたようである。

別所によれば，彼に従軍の命令を下したのは，当時東方社の理事であったフランス文学者の中島健蔵であった[30)]。中島は，1942年１月に陸軍第25軍宣伝班に徴用され，マレー・シンガポールで軍の宣伝活動に携わった。同年末に帰国し，43年初頭から東方社に関わるようになる。

戦局の悪化と共に大型のグラフ雑誌などの輸送は難しくなったため，宣伝物は小型化し，また配布先も中国が主となっていった。中島は，44年後半には理事長の林達夫に代わって社の運営の中心になり，華僑向けや中国向けの宣伝物の制作に力を注いでいた[31)]。前述のように，東方社でも敗戦後，制作物類は焼却しており，現物は確認できていないが，多川によると，中国向けの小型のグラフ雑誌や，壁や掲示板に貼ることのできる「壁写真ポスター」などが作られていたという。その中には，フィリピンや日本における米軍の空襲による被害の写真を使ったものもあった[32)]。中国人の被害であれば宣伝効果はより高まろうが，別所の写真の利用の有無については，現在のところ不明である。

別所の派遣は，支那派遣軍報道部の嘱託カメラマンとして従軍していた

小柳次一（国際報道株式会社[33]）の後を埋めるためだったのではないかと思われる。小柳は，漢口から湘桂作戦に従軍していたが，衡陽占領後，大陸挺進隊という部隊の取材にまわる[34]。大陸挺進隊は，重慶軍の扮装をして次の戦闘地に先回りし，日本軍への抵抗をやめるように呼びかける部隊であった。大陸挺進隊の取材は小柳の希望であったようだが，湘桂作戦最大の山場を前に，本作戦に従軍するカメラマンがいなくなったため，別所が派遣されたものと推察できる。

したがって，別所の身分も小柳と同じであったのではないかと思われる。現地軍の報道部は，日中戦争期に作られたもので，軍のスポークスマンであると同時に現地での宣伝工作を担当していた[35]。軍報道部写真班も，国内及び海外に送る写真を撮影しながら，現地宣伝用の宣伝物を作製していた。小柳は，日中戦争初期から軍報道部のカメラマンとして多くの戦場に従軍したカメラマンであったが，「戦地では「軍報道部」という腕章を巻いていますので，新聞社から来ている報道班員と違って，撮影できないことなどいっさいありませんでした」と証言し，「なんでも撮影し」たという[36]。別所の写真の中に，「軍報道部」の腕章を巻いた本人の写真もある。アジア・太平洋戦争期には，新聞社の特派員なども陸軍報道班員あるいは海軍報道班員として軍に組み込まれていた[37]が，軍報道部のカメラマンは，本来彼等とは役割が異なっていた。

また小柳は，大陸打通作戦期には，「写真を撮っても，それを載せる宣撫雑誌もないのに，従軍撮影だけはさせていた[38]」という。おそらく，小柳の周辺では，すでに宣伝物は発行されていなかったのであろう。しかし，前述のように，東方社は中国向けの宣伝物を作り続けており，そのため，東方社から従軍カメラマンを派遣することになったのではないかと推察される。また，その当時，菊池俊吉や林重男など若手主力カメラマンたちはすでに海外取材に出ていた[39]ため，別所が起用されたものと思われる。

第 2 節　別所弥八郎の足取りと従軍関連写真の概要

ネガホルダーのメモなどから，別所が大陸打通作戦従軍時に撮影したと推定できるものは，現在のところ，東京大空襲・戦災資料センターに寄贈されたもの976点，別所に返却されていたもの437点，別所への返却を仲介したと思われる林重男が保管していたもの[40] 281点の計1694点である[41]。資料が写真ネガであるため文字情報に乏しく，撮影された場所を探る手がかりは，写真に写っている文字や事物，ネガ番号，及び当時のネガの整理状況などに限られるが，それらを手がかりに，別所の足取りに沿って場所ごとに集計したものが表１である[42]。これは現時点での暫定の分類であ

表１　従軍関連写真場所別集計

場所	センター所蔵分	別所所蔵分	林所蔵分	合計
長沙			24	24
長沙～衡陽	75			75
桂林	38	220	235	493
柳州	43	204		247
仏印	17			17
西江沿岸		12		12
広東	158			158
香港	314			314
南部粤漢線沿線（広東～衡陽）	191			191
衡陽～衡山	24			24
武漢	81			81
不明（飛行場・飛行兵　広東か）	29			29
不明			22	22
ネガ番号なし（判読不可）	6	1		7
合計	976	437	281	1694

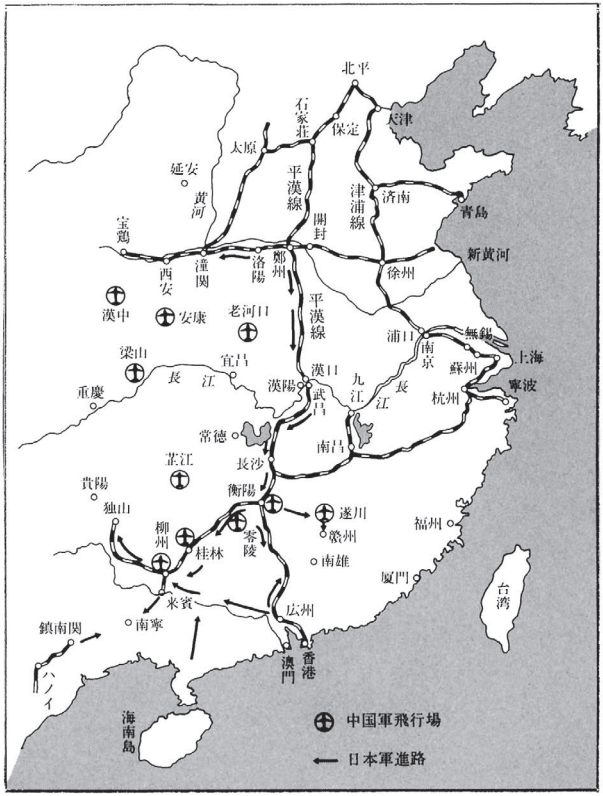
り，今後の精査を必要とするが，大体の傾向をつかむことは可能である。別所の従軍関連写真の主なものについては次章で改めて述べるが，本節では，別所の足取りを追いながら，各地の写真の特徴について簡単に述べておきたい。

別所の従軍時の足取りを示す資料は，二つある。一つは前述の写真集『ある従軍カメラマンの証言』の「まえがき」であり，もう一つは『読売報知』（45.1.13，14）に掲載された記事「大陸縦断路を往く　別所報道班員手記」（上）（下）である。両者共に「撮影日誌[43)]」をもとにしていると思われるが，後者は従軍の途中のものであり，また，掲載にあたっては制限もあったと思われる。前者も短いもので，共に充分な資料とはいえず，また食い違うところもあるが，両者を照らし合わせて別所の足取りをたどることは，ある程度可能である。以下，食い違う日付については「まえがき」を基本とし，別所の足取りをたどろう。

1944年９月23日に東京を立った[44)] 別所は，10月６日に南京に到着し，南京報道部に従軍の申告をする。その後，鉄道，船，徒歩をまじえ，武漢，長沙，衡陽へと進む。その間に何度か米軍の空襲に遭っている。また，長沙～衡陽間は雨が続き，写真撮影は難しかったようだ。そのためか写真は少ないが，水運の様子や廃墟の中で家を建て直している人々，大きな荷物を抱えて移動する人々などが写されている。

11月11日に衡陽に到着するが，桂林の陥落を聞き，別所はその日の夜トラックに便乗し，桂林に向かう。17日の夜に到着し，その後旺盛な取材活動を始める。桂林で撮影したものについては次章で述べるが，破壊された飛行場や洞窟陣地，市民生活などテーマは多岐にわたっている。桂林での取材の後，柳州へ進む。桂林への行程でも空襲に遭っているが，柳州ではさらに激しい空襲にさらされたようである。柳州では，破壊された飛行場や鉄道のほか，市街の空撮も行っている。また，進駐してきた飛行兵たちも撮影している。飛行兵については，兵舎でくつろぐ様子や地図を囲んで話し合う姿などもあるが，広東で撮影されたと思われるものも含めて，中

図１　大陸打通作戦関係図



田中仁ほか著『新図説中国近現代史―日中新時代の見取図―』（2012年　法律文化社）

空を見上げる顔やさまざまにポーズを決めた写真などもある。

柳州からさらに南寧を経て，仏印ドンダンに入る。「大陸縦断路を往く」では，仏印に入ったことは書かれていないが，ここで空襲被害の写真を撮影している。在華米空軍は仏印やタイにも空襲を行っていた。仏印で撮影されたと思われる17枚は，すべて空襲被害に関する写真である。

ついで西江を下り，1944年12月31日に広東に到着する[45)]。広東では，日中の市民や市街を写したものが主となっている。続いて入った香港で撮影

された写真のテーマは，市民・市街，船舶修理・造船，香港海員養成所，空襲被害の４つである。

南部粤漢線打通作戦は，1945年１月から２月にかけて行われた。別所は，「広東から北江を遡って衛陽（ママ）に至[46]」ったとしており，船で進む様子を写した写真もあるが，南部粤漢線沿線で撮影された写真には，陸路を徒歩や馬で進む日本軍の将兵をとらえたものも多い。その後は，「九十日間歩き通して無事南京に到着した[47]」と書かれているが，その行程ははっきりしない。武漢で撮影されたものは，「復興武漢」というプラカードを掲げて，破壊された街の中を練り歩く人々の様子が中心である。そのほかには，日系企業に勤める日本人や観光名所の写真などがある。

「まえがき」では，東京に戻ったのは1945年４月８日となっているが，他の資料では５月となっているものもあり[48]，「九十日間歩き通して」という記述からも帰還したのは５月ではないかと思われる。

第３章　別所弥八郎従軍関連写真の特徴と意義

本章においては，別所の従軍関連写真の中で最も枚数の多い桂林と香港を中心に，重要と思われるものについて述べていきたい。

第１節　戦闘及び日中両軍に関するもの

①　飛行場

桂林で撮影された写真の中で最も枚数が多いのが，飛行場の写真（123枚）である。飛行場の破壊の様相を撮影した写真は，他に柳州で撮影されたものが20枚ほどある。

別所より一足早く，陥落の前夜に桂林に入った毎日新聞特派員の益井康一によれば，桂林には３つの飛行場があり，最も大きい第１飛行場（西飛行場）の主滑走路は，幅 500 m，長さ 3000 m に余るもので，周辺には天然の洞窟を利用した弾薬庫や燃料庫，さらには先の別所の写真にあるよう

な格納庫や修理工場などがあった。「空からの攻撃にたいしては，絶対不死身の桂林航空要塞」であり，益井は飛行場のアウトラインをつかむのにほぼ一日歩き通したという[49)]。

米空軍は，９月中旬にすでに桂林の飛行場を放棄して，南寧などの奥地に移動していたが，その際に滑走路を爆破するなど諸施設を破壊していた。益井は「桂林航空要塞」とその破壊の様相に驚いているが，第40師団歩兵第236連隊の中尉であった佐々木春隆も，爆破口の断層を見て，その基礎工事の堅牢さに「空恐ろしい思いがした[50)]」という。

別所にも同じ驚きがあったことは想像できる。別所は，滑走路や爆破で開けられた大穴，その修復工事，放置された弾薬，掩体や格納庫などさまざまなものを撮っている。また，周辺の山から撮影したと思われる飛行場の情景も含まれている。前述の『読売報知』に掲載された写真のように，飛行機の残骸も多い（図２）が，益井によれば，廃品置場に敵の爆撃機や戦闘機が積まれていたという[51)]ので，それらは進攻作戦以前に繰り返されていた第５航空軍の航空戦[52)]によって，爆撃されたものかと思われる。

図２　桂林飛行場

②　市街の破壊状況と桂林南駅

益井は陥落直後の桂林について，「市街戦と爆撃戦で街の建物はことごとくあとかたもなく破壊され，瓦礫の都と化していた。／城内は占領下とはいえ，まだ敗残兵の掃討戦がつづき，米空軍が爆撃していく[53)]」と記している。前述の加藤報道班員の「米機の盲爆に廃墟と化した市街に突入」でも「瓦礫の都」が見てとれるが，別所もこの「瓦礫の都」を撮影して回り，100枚余りの写真を残している。

その中で最も凄惨な写真が，桂林南駅周辺を撮影したもの（18枚）である。桂林南駅の駅舎は西洋風のモダンな建物で，建物自体は原形をとどめているが，屋根は崩れ，窓ガラスもなくなっている。壁には機銃掃射の痕と思われる穴が数か所あいており，ベンチなども散乱している。また，プラットホームにも崩れているところがある。

駅の周辺あちらこちらに死者が横たわっているが，駅舎の入口前で多くの人が重なり合うように倒れている（図３）。その中には手を縛られている人もあり，また，軍服でない人もあるように見える。別所は，『ある従

図３　桂林南駅前

軍カメラマンの証言』（15頁）の中で，彼らを「空軍の奇襲攻撃」による犠牲者だとしている。確かに周辺には銃爆撃の痕跡が見えるが，彼らの死因については，写真からだけでは判断は難しい。しかし，無残な最期を遂げた犠牲者たちの姿は衝撃的で，見る者の目をひきつける。犠牲者たちが横たわる悲惨な現実は，別所にとっても衝撃的なものであったのだろうが，それらの写真は，戦争の残虐性を強く訴えかけてくる。

③　洞窟陣地と毒ガス戦

桂林の写真の中には，七星巌などの洞窟陣地やその周辺を撮影したと思われるものが，52枚ある。別所は晩年，これら洞窟陣地における死者を日本軍の毒ガスによる犠牲者だと証言し，毒ガス戦を伝えることに力を注いだ。

前述のように桂林の洞窟は巨大であり，数百人から千人も収容可能なものがあった。重慶軍は，弾薬や食糧などを収納し，洞窟を兵営化させていた[54)]。別所は，机やベッドなどが散乱する洞窟内部や洞窟の周りの防御

図 4　桂林洞窟陣地

物などを撮影している。洞窟内で亡くなった兵士を確認できる写真は，３枚ある。これらもまた凄惨な現場を記録した写真である（図４）。

しかし，これらも写真からは，毒ガスによる死者であるのかどうかの判定は難しい。日本軍は1944年７月14日に毒ガスの使用停止を命じていた[55]が，中国の資料には，日本軍が桂林の戦いで毒ガスを使用したと記述しているものがある[56]。また，佐々木春隆は，「赤筒の使用を考えてみたが，あいにくの北風であった[57]」と述べており，条件が合えば使用していたと推測できる。さらに佐々木は，「手榴弾や赤筒（くしゃみ剤）を以て止めを刺す方法を研究し[58]」ていたともいう。

洞窟陣地内の死者について，別所は前述の「大陸縦断路を往く」（下）に，「全くこの世ならぬ凄惨な風景を見た」と書いている。しかし，ここではその死因を，「米兵のため洞窟の中にとぢこめられて殺されたのであらう」としている。当時においては，当然毒ガスの使用は書けないことであり，逆に，米空軍の重慶兵への爆撃の記事は奨励されていた。また，別所は，複数の洞窟を回っていたと思われる[59]ので，その両方に遭遇していたのかもしれない。

事の真相は真相として重要ではあるが，「報道写真」という観点からすれば，「まったく正視にたへぬ光景[60]」にカメラを向けたということが重要であろう。洞窟陣地の光景は，別所が桂林で見たものの中で，最も悲惨な光景だったのだろう。だからこそ，当時の手記にも書き，戦後には，その証言を始めたのだと思われる。「正視にたへぬ」洞窟陣地の惨状を写し撮った写真は，桂林南駅周辺の写真と共に，第１章で述べた悲惨な現実をとらえた戦争末期の「報道写真」につながるものである。しかし，その訴求力は格段に大きい。自らが目の当たりにした衝撃的な現場に向き合い，戦争のもたらした残酷な現実を如実に写し出したところに別所の写真の特徴と意義があろう。

④　行軍・進駐

桂林には行軍・進駐の写真はわずかだが，前述のように南部粤漢線沿線の写真は，多くが行軍の写真である。

南部粤漢線は，重慶軍のゲリラ戦と米空軍の空襲により，橋やトンネルが破壊され，寸断されていた。別所の写真には，爆破されて不通になったと思われるトンネルを迂回したり，破壊された大きな橋の横の小さな仮設の橋を渡っていく日本軍将兵たちが写っている（図５）。また，脱線して崖に崩れ落ちている列車の横を日本軍将兵たちが進んでいる様子をとらえたものもある。その他，民船を引く様子や泥の中からトラックを引き上げる様子を撮ったものなどがある。

『写真週報』（359号　1945.2.14）の記事「粤漢線の打通なる」には，「軍需品と兵隊さんを満載した」貨車が走っている写真が掲載されているが，別所の写真には，そこかしこにある破壊の現実と，その破壊を乗り越えるというよりも，それをよそ目に歩き続ける兵士たちが写し撮られている。南部粤漢線を行く兵士たちの写真も，桂林に進駐してきた兵士たちの

図５　南部粤漢線沿線行軍

写真も，悲壮というほどではなく，兵士の顔に明るさのあるものもある。しかしながら，全体としては，あまり颯爽としたものではなく，士気が上がるような写真ではない。これらも第１章で述べた新聞の行軍写真に類するものであるが，新聞写真などには現れない破壊の現実を記録しているところに別所の写真の重要性があるだろう。

⑤　掃討戦と捕虜

別所の写真の中で，日本兵が闘っている写真は，２組計９枚だけである。いずれも桂林の掃討戦のものと思われる。ネガ番号の早い組４枚のうちの３枚は，地に這って銃を構えている６～７名の兵士をとらえたもので，最後の１枚にだけ，少し前かがみになりながら立って進む兵士が１人，中景に写っている。４枚とも非常に低い視点で写している上，壊れた人力車なども写りこんでいて，写真としては少しわかりにくい。

一方，もう１組の５枚は，10人ほどの兵士が写っており，伏せて遠くを窺うような写真もあるが，立ち上がって走るスピード感のある写真もある。しかし，後の組のものは先の組の写真に状況が似ており，先の組で撮った掃討戦をわかりやすく，かつ，迫力ある写真にするために，再現して撮影した演出写真ではないかと思われる。

捕虜については，桂林で40枚ほど撮っているが，ほとんどが騎馬戦などレクリエーションに興じる様子をとらえたものである。写真に写る捕虜たちの表情は明るく，伸びやかで，笑顔もこぼれている。これらの写真からは，捕虜たちが遊びを楽しんでいた自然な様子が窺える。

掃討戦及び捕虜の写真は，何らかの宣伝に利用するためのものであったとも考えられるが，それだけでなく，やはり別所が心動かされ，記録しておきたいと思ったものなのではないだろうか。

第 2 節　一般市民に関するもの

①　日本軍に動員される中国人

日本軍に動員される中国人については，大きく分けて二つある。一つは，鉄道や飛行場などの修復工事に動員される中国人及び苦力，つまり肉体労働への動員であり，もう一つは，宣伝・宣撫活動に動員される中国人である。

前者は，第 1 章で述べた『アサヒグラフ』や『写真週報』の記事などにも掲載されているが，別所も桂林で鉄道復旧工事の写真を55枚，飛行場の修復工事の様子を10枚ほど撮っている。鉄道復旧工事には多くの人が集められているが，その中には少年の姿も多い。桂林以外の場所でも，橋や道路の修復工事に動員される中国人の写真が散見される（図 6 ）。南部粤漢線沿いの工事現場で働く人の中には，女性らしき姿もある。

苦力の写真は，桂林の写真の中に 6 枚ほどあるだけだが，荷物を運んでいる様子だけでなく，道で行き倒れていると思われる苦力を撮ったものが

図 6　南部粤漢線沿線道路工事

２枚含まれている。

宣伝・宣撫活動への動員については，「復興隊」の字の入った腕章を巻いた少年が，15人ほどの聴衆の前で演説をしている写真が12枚ある。桂林での撮影と思われるが，日本軍の兵士が横で見守っている様子や日の丸の入った宣伝物を持っている聴衆も写っている。また，聴衆だった少数民族と思われる青年が少年と並んで前に立っている写真もある。少年の顔のアップもいくつかあるので，何らかの宣伝物に利用するために，色々なカットを撮影していたのではないかと思われる。

武漢の「復興武漢」をうたったパレードも宣伝・宣撫活動の一つであろう。米空軍は武漢地区にも空襲を繰り返していたが，その空襲によって破壊されたと思われる街中を，「復興武漢」のプラカードを先頭に，蛇踊りや祭りの扮装をした中国人たちが練り歩く様子を，別所は追いかけている（図７）。中国人だけでなく日本軍将兵や人力車などで混雑する通りを進む様子や，パレードを見るためにがれきの中を急ぐ人々，あるいはビラをもらおうとする子供たちなど30枚余りの写真が残されている。民俗的な祭り

図７　武漢パレード

の要素を取り入れるために，踊り手たちが動員されたのであろうが，多くの人がパレードに続いたり，見物したりしており，人々がパレードにひきつけられていた様子が写真からは見てとれる。

がれきの中の健在ぶりを示すことは，攻撃・空襲を受けた側の宣伝の主要なテーマの一つである。しかし，これらの写真は，必ずしも宣伝のためのものだったとも思えない。前述の捕虜の写真同様，民俗的な祭りに興じる人々の人間的な姿にひかれて，別所は撮影を続けたように見受けられる。パレードに動員された人も見物人も含めて，そこに集まった人々に抱いた別所の好奇心が，写真には表れているように思われる。

② 市民生活

市民生活には，中国人を撮ったものと在留日本人を撮ったものがある。

中国人を撮ったものについては，長沙から柳州までは，地上戦や空襲の被害を受けた後のがれきの中で生活する人々が中心である。前述のように，大きな荷物を抱えて移動する人々や家の修復にあたる人々などが写さ

図 8　衡陽市街

れている（図８）。子供たちもがれきの中で廃材を集めたりしているが，新聞のようなものを手に裸足で歩いている少女の表情は険しい。

桂林でも市民生活を写したものが20枚ほどある。その中には，がれきの中で配給に並ぶ人々を撮ったものもあるが，唐辛子のようなものを干した路地裏を行きかう人々や子供たち，土間のかまどで料理をする人々の写真などもある。後者は，彼らが従来の生活に戻りつつあることを示しているように思われる。

一方，広東や香港の写真では，市場や繁華街など賑やかな場所をとらえたものが多い（図９）。露店が多いが，飲食物や衣類を並べた店，人々が行きかう通りや公園，大きな橋を人や物が渡っていく様子などが撮影されている。香港では，競馬場に多くの日中両市民が来場し，楽しんでいる姿も写されている。

このように，別所がとらえた中国の一般市民の生活状況は，場所によっ

図９　広東市街

てそれぞれ異なっていたが，そこに写る中国人は，“あるべき国民”ではなく，そこにいる人々そのものであった。それぞれの地に生き，生活する現実の人間の姿をとらえ続けていたことは，別所の従軍関連写真の重要な特徴であろう。

しかし香港では，中国人女性３人をモデルにした宣伝用と思われる写真も撮影している。あまり垢抜けたものではないが，空を見上げて笑うなど，ポーズをつけて撮影したと思われるものがある。また，香港海員養成所の生徒やドックの工員たちを撮ったものの中にも，ポーズをつけて撮影したと思われるものが含まれている。

一方，在留日本人を写したものには，日系企業の従業員たちの記念写真のようなものもあるが，広東では広東神社に初詣に訪れたと思われる人々や写真ポスター展を見に来た人々の姿などが写されている。後者は，軍報道部が主催した展覧会だと思われるが，「米機ノ獣行」と題して米空軍による広東空襲の被害写真にアメリカ批判の言葉を添えたものや，各領域での敢闘を訴えるようなものが見受けられる。別所は，その準備の様子や展示物を見学する人々や子供たちを撮影している。

別所は，その他の場所でも，壁に描かれたスローガンや漫画など，日中両軍の市民に向けた宣伝の様相を撮影している。市民生活と共に，市民へ向けた宣伝戦を記録している点も注目すべき特徴であると思われる。

③　空襲被害

前述のように，別所は，仏印及び香港で，空襲直後の被害の様子を撮影している。

仏印の17枚は，ほとんどがホテルや建物の被害状況であるが，傷者を運ぶ様子を写したものも３枚ある。一方，香港の空襲被害の写真は，全部で63枚ある。香港の写真は，別所のもとには返されていなかったのだが，別所は，『ある従軍カメラマンの証言』の「まえがき」に，「香港では米機の無差別爆撃に逢い」と書いている。他の場所でもかなり空襲に遭っていた

はずだが，他の場所での空襲には触れていない。おそらく香港の空襲が最も強く印象に残っていたのであろう。

前述の別所の足取りから考えると，香港で空襲に遭ったのは，1945年１月と推定される。香港は，45年１月15，16日に米機動部隊の艦載機による銃爆撃を受け，17日と21日に第14航空軍の空襲を受けている[61)]。前述の新聞記事にもあるように，それらの空襲で大きな被害が出ていた。別所の写真は，以上のいずれかの日の空襲の直後のものと思われる。空襲被害写真のネガは，二つのかたまりがあるので，二日にわたるのかもしれない。

別所は，建物の被害とともに，壊れた建物の中や道に横たわる死者たち（図10），その死者に手を合わせる女性，がれきの中から運び出される傷者，あるいはトラックに死傷者を収容する様子などを撮影している。がれきの中で泣き叫んでいる女性をとらえた写真からは，彼女たちの悲痛な声が聞こえてきそうである。

図10　香港空襲

これらの写真は，前述した『アサヒグラフ』の記事「重慶はアメリカから何を得たか」に掲載されている写真に類するものだが，その衝撃力は『アサヒグラフ』の写真よりもはるかに強い。それはそこに写っているものが，紛れもなく今そこに起こった空襲がもたらした生々しい被害の状況であるからであろう。非戦闘員までも巻き込んで犠牲にする空襲の残酷な現実が，それ自体がもつ強烈な訴求力で迫ってくる，それが別所の空襲被害写真の特徴である。

おわりに

小柳次一は，大陸打通作戦時にはもう軍報道部の指示が前線の報道班員に届く状態ではなかったという[62)]。別所もまた，指示のない中，特権的立場を生かしつつ，自己の裁量で撮影を続けたものと思われる。別所は，戦争の悲惨な現実に衝撃を受けながら，その現実を記録していく視線や態度を獲得していったのであろう。別所にとって写真を撮ることは任務であったが，ネガからは，任務や規制を越えて，別所が衝撃を受けたもの，心を動かされたものをそのままに記録しようとしていたことが窺える。その視線・態度は，日本に戻ってからも変わらず，横浜空襲における犠牲者の撮影へとつながる（図11）[63)]。

別所の写真は，必ずしもうまいとはいえない。しかし，戦争のもたらす悲惨な現実とその犠牲となった人々，あるいはその中で生きる人々を写し撮った写真は，見る者の目をひきつける。市民生活を撮ったものなどには，それぞれに人間味が感じられ，それが訴求力となっているが，戦争の犠牲になった人々の訴求力はさらに大きく，犠牲者をとらえた写真は一層重い意味を持つ。

前述のように，日本の当局は，空襲の記事や写真について厳しい取り締まりを行っていた。横田省己は，その中で唯一許されたのが，「敢闘美談」だという[64)]。当局は，空襲による被害の実態は隠蔽し，悲惨な状況

図11　横浜空襲

の中で頑張る姿だけを人々に伝えさせようとしていたのである。

しかし，今回発見された東方社の写真ネガの中には，1944年11月24日から約半年にわたる東京空襲に関係するものが，600枚近く含まれていた[65]。その中には「敢闘美談」的なものも含まれているが，多くが空襲の被害状況を写したものである。この他に別所の横浜空襲の写真など，撮影者に返却されたものの中にも，空襲被害を撮影したものがある[66]。また，東方社以外でも全国各地で様々な人が空襲被害を撮影していた[67]。その中には，メディア関係者もあったが，写真館のカメラマンやアマチュアもいた。さらに言えば，警視庁職員の石川光陽が撮った東京空襲の被害写真もある[68]。石川のものは警視庁の記録のための写真であり，「報道写真」とは異なるが，人的被害も記録した貴重なものである。それらは，公表されなかったにしても，存在はしていたのである。

ただ，現在判明している限りにおいて，東方社で別所以外に人的被害を撮影したカメラマンはいない。また，石川のような例もあるが，東方社以外でも空襲による死傷者を撮影した写真は稀だと思われる。別所は，横浜

空襲の際に死者を撮影していて，憲兵に拳銃を構えられたと記している[69]。また，菊池俊吉は，死者を写さなかった理由を，自己規制という以上に「気の毒という感じがあったんじゃないですか」と話している[70]。空襲による死者の写真の撮影は，厳しい取り締まりの上に心理的な問題が加わり，難しかったであろうことは想像に難くない。したがって，それらの制約を越えて犠牲者たちを撮影した別所の写真は，悲惨な現実を写し出したものの中でも最も徹底したものだったといえよう。

空襲は戦争の中で最も悲惨な現実の一つであるが，戦争末期には，その悲惨な現実が一般の日本人の周りにあったのであり，別所の犠牲者の写真ほど徹底したものではないにしろ，その現実を撮影した写真は，前述のとおり，少なからず存在していた。また，それに先駆けて，『アサヒグラフ』の「重慶はアメリカから何を得たか」や加藤報道班員の「米機の盲爆に廃墟と化した市街に突入」など，別所の従軍関連写真ほど強いものではないが，中国の悲惨な現実が垣間見える写真もあった。写真は本来現実を記録し，伝えるという特性を持つメディアである。敗色が濃くなる中，「“国策”報道写真」だけでなく，写真本来の特性に立ち戻り，悲惨な現実をとらえ，戦争の残酷さを写し出す「報道写真」も撮られていたのである。

これら悲惨な現実を撮影した写真は，戦争の残虐性・非人道性を告発する力を持つ。それゆえにまた，宣伝につながる可能性も持っているが，「報道写真」として非常に重要なものである。「“国策”報道写真」を越えたこれらの「報道写真」についての研究はまだ浅いが，広く研究していく必要があると思われる。

1）「報道写真」の変遷については，拙著『戦時グラフ雑誌の宣伝戦―十五年戦争下の「日本」イメージ』（青弓社　2009年）を参照されたい。

2）多川精一は1970年代末から資料や証言を収集しはじめ，自らの個人雑誌『E+D+P』に特集記事などを発表し，『戦争のグラフィズム―回想の『FRONT』』（平凡社　1988年）及び『焼跡のグラフィズム―『FRONT』から『週刊サンニュース』へ』（平凡社新書　2005年）を刊行した。また，『FRONT 復刻版　解説』Ⅰ～Ⅲ（平凡社　1989～90年）や特集「戦時下のアヴァンギャルド」（『すばる』12巻10号　1990年10月）に，東方社及び

『FRONT』に関わる証言や論考が収録されている。

東方社及び『FRONT』に関わる論考が含まれる先行研究としては他に，拙稿「太平洋戦争下の報道技術者―今泉武治の「報道美術」と写真宣伝」（『立命館大学人文科学研究所紀要』75号　2000年11月），川崎賢子・原田健一『岡田桑三映像の世紀―グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』（平凡社　2002年），川畑直道『原弘と「僕達の新活版術」―活字・写真・印刷の一九三〇年代』（トランスアート　2002年），前掲拙著『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』などがある。

3）　写真ネガ発見と寄贈の経緯については，井上祐子・山辺昌彦・小山亮・石橋星志『アメリカ軍無差別爆撃の写真記録―東方社と国防写真隊―』（公益財団法人政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センター　2012年）の「はじめに」を参照されたい。

4）　前掲多川『戦争のグラフィズム』226頁

5）「未公開写真・日本大空襲　座談会カメラマンは証言する―はじめて明かす撮影から公開まで―」『アサヒグラフ』（1975.3.14）43～44頁

6）　横浜空襲撮影者として証言しているものに，前掲「座談会カメラマンは証言する」のほか，「陸軍報道班員・別所弥八郎氏の記録　地獄絵見た，撮った」（朝日新聞東京本社企画第一部編『日本大空襲ドキュメント写真集』原書房　1985年　136～139頁）がある。また，毒ガス使用の証言及び大陸打通作戦従軍に関するものには，「「戦争のむごさ伝えたい」」（『北海道新聞』1989.10.26　夕刊），「45年目の戦場写真・毒ガスは使われたか～元・従軍カメラマンが写真展～」（NHK 札幌ローカルニュース　1990.7.26），「［ひと］別所弥八郎さん　日本軍の毒ガス使用を証言し続ける元従軍カメラマン」（『毎日新聞』1990.11.24　朝刊）がある。

7）　別所は前掲「座談会カメラマンは証言する」には東方社のカメラマンとして出席しており，写真集『ある従軍カメラマンの証言』の「まえがき」には，東方社のカメラマンであったことを書いている。しかし，注6であげたそれ以外の資料及び『ある従軍カメラマンの証言』の「私の略歴」では，別所の身分は陸軍報道班員となっている。また，写真の貸し出しに応じる手紙（日本機関誌協会京滋地方本部　吉田保宛　1990.7.11）に添えられた「私の略歴」でも「陸軍報導（ママ）班員として大陸に従軍」と書いている。

8）　原剛「一号作戦―実施に至る経緯と実施の成果」（波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の軍事的展開』慶應義塾大学出版会株式会社　2006年）283頁，大陸打通作戦に関する研究は少ないが，参加した将兵たちの手記や体験記などは多数出版されている。

9）　在華米空軍は，1941年初めに結成された米人の義勇空軍「フライング・タイガーズ」が発祥であり，その後42年７月に正式に米陸軍航空部隊に改編されて第23追撃隊となり，さらに翌43年３月に米陸軍第14航空軍に改編された。44年４月30日現在の配備機数は，偵察機10（P38），戦闘機294（P38，P47，P40，P51），爆撃機168（B24，B25）の472機であり，重慶空軍233機と合わせて705機と判断されていた。当時の日本の第５航空軍の出動可能機数は約230機であり，彼我の戦力比は約３対１であったという。（益井康一『本土空襲を阻止せよ！―従軍記者が見た知られざる B29 撃滅戦』光人社　2007年　23～26頁，95頁，98頁）

10）　防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書16　一号作戦＜２＞湖南の会戦』（朝雲新聞社

1968年）4頁

11） 航空自衛隊幹部学校『戦略爆撃調査団報告　第19巻』（1960年　171頁）によれば，1944年7月から45年2月までの第14航空軍戦闘機の出撃の70％が「爆撃および対地射撃任務」であり，そのうちの40％が「陸上輸送機関」（45年には60％以上），10％が「船舶」，20％が「軍事目標」に対するものであった。

12） 前掲『戦略爆撃調査団報告　第19巻』（202頁）によると，1944年9月1日から12月15日までの第14航空軍の出撃数は総計で6651回にのぼったという。

13） 前掲『湖南の会戦』5頁

14） 前掲益井『本土空襲を阻止せよ！』21頁

15） 在華米空軍に関する新聞記事は大変多いが，グラフ雑誌にもいくつかある。『写真週報』には，「激化する航空戦」（328号　1944.7.5），「衡陽陥落と在支米空軍」（337号　1944.9.6）など，『アサヒグラフ』には，「敵の空襲企図」（1944.6.7），「大陸戦線二三五〇キロ在支米空軍基地覆滅の運命」（1944.7.19），「大陸分断作戦の全貌」（1944.11.8）など，『大東亜報』には，「在支米空軍撃滅への戦ひ」（1944.8.15），「在支米空軍殲滅へ」（1944.9.15）などの記事がある。

16） 「決戦輿論指導方策要綱」（1944.10.5）（『明治百年史叢書　敗戦の記録』原書房　1967年　195頁）

17） 「対支作戦ニ伴フ宣伝要領」（1944.7.3），「対敵宣伝方策要綱」（1944.10.5）（前掲『敗戦の記録』28頁，198頁）

18） 「These Atrocities Explain Jap Defeat」（『LIFE』1938.5.16），「Canton Bombing」（同1938.6.20），「War in China」（同1941.6.28）などがある。

19） 赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』（校倉書房　1985年）293頁

20） 写真の取締りについては，『不許可写真史』（一億人の昭和史10　毎日新聞社　1979年），草森紳一『不許可写真』（文春新書　2008年）などを参照されたい。

21） 日本の空襲編集委員会『日本の空襲十　補巻　資料編』（1981年　三省堂）39～40頁
同書においては，「新聞掲載禁止事項の標準」（昭和一六年四月改訂）「防空関係」として挙げられているが，横田省己はこの禁止事項について，（昭和―井上注）（17・4・18）の日付をつけている（「がんじがらめの言論」『週刊朝日』1958.5.14　61頁）。なお，横田は『朝日評論』（4巻3号　1949年3月）にも，「言論はどう弾圧されたか」という論文を発表しているが，その当時の肩書は朝日新聞社校閲部長となっている。

22） 1944年11月10日の占領前後の各紙には，桂林や柳州の市街地や飛行場の写真など資料的な写真や航空部隊撮影の航空写真が掲載されている。

23） 前掲拙著『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』125～126頁

24） 1944年12月10日に仏印までの打通が成功し，45年1月27日に南部粤漢線の打通も達成される。南部粤漢線打通後は，粤漢線近くの遂川，南雄，贛州の飛行場への攻略作戦が展開された。

25） 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書74　中国方面陸軍航空作戦』（朝雲新聞社　1974年）408頁

26） 「座談会闘ふ報道写真を語る」（『報道写真』4巻1号　1944年1月）41頁

27）　森金千秋『湘桂作戦』（図書出版社　1981年）233頁

28）　別所の経歴については，注６，７であげた資料及び「68歳ただいまラドンに魅せられて」（『内外タイムス』1985.5.9）による。なお，別所は，戦後は芸能プロダクション社長や作詞家（ペンネーム別所透）として過ごした。

29）　別所は前掲『ある従軍カメラマンの証言』の「まえがき」に，「昭和十九年四月，東宝撮影所で加藤隼戦闘隊と言う映画を撮影中召集が来て旭川第七師団に入隊」と書いているが，「加藤隼戦闘隊」は1944年３月に封切られており，「昭和十九年」に撮影していたというのは別所の記憶違いと思われる。前掲「座談会カメラマンは証言する」（45頁）では，「ぼくも十八年組だね」と話しているので，1943年に東方社に入社したものと思われる。

30）　前掲別所『ある従軍カメラマンの証言』「まえがき」

31）　前掲多川『戦争のグラフィズム』190頁，1945年４月頃に林達夫が理事長を退いた後，中島は木村伊兵衛とともに理事長代行となっている（前掲『FRONT 復刻版　解説Ⅰ』58頁）。

32）　前掲多川『戦争のグラフィズム』155頁，189～193頁

33）　名取洋之助が1933年７月に立ち上げた日本工房は，39年５月に国際報道工芸株式会社に改組した後，43年１月に国際報道株式会社に名称を変更する。

34）　小柳次一・石川保昌『従軍カメラマンの戦争』（新潮社　1993年）219頁，なお小柳の大陸打通作戦従軍写真については，小柳自ら持ち帰った大陸挺進隊の写真が一部残るだけで，その他は輸送中に紛失したり，処分されて残っていない（同222頁，247頁）。

35）　中国現地軍の報道部については，その創設者である馬淵逸雄の著書『報道戦線』（改造社　1941年）に詳しい。

36）　前掲小柳・石川『従軍カメラマンの戦争』99頁

37）　アジア・太平洋戦争期の報道班員の規定については，時期や人によって異なるようで，証言者によって食い違いがあるが，当該期においては，各社の特派員も軍の報道班員を兼ね，彼らが撮影した写真は軍報道部に送られたようである。紙面に掲載されるときは，○○報道班員とクレジットされ，社の特派員である場合には本社特派員と付け加えられたという石井幸之助の証言（「座談会もうひと時代違う従軍カメラマン―日中戦争から太平洋戦争まで―」『日本写真家協会会報』87号　1991年７月　20頁）が，実際の紙面にも合致すると思われる。

38）　前掲小柳・石川『従軍カメラマンの戦争』219頁

39）　前掲多川『戦争のグラフィズム』166～167頁

40）　前掲「「戦争のむごさ伝えたい」」に，「同僚を通じて別所さんのもとに返された」とあるので，別所の写真ネガは林を通じて別所に返却されたが，何らかの理由でその一部が林の手元に残ったものと思われる。

41）　前掲「「戦争のむごさ伝えたい」」などの中では，従軍時に約２万枚の撮影をし，そのうちの約700枚が別所に返却されたように書かれているが，返却されたものは，横浜空襲のものを含めて約550点である。現在までに収集できた諸資料から考えると，従軍時に２万枚撮影したというのは多すぎるようにも思われるが，小柳のフィルム同様，別所のフィルムの中にも紛失・処分されたものがあることは考えられる。この点については，今後の調

査が必要である。

42） 衡陽～衡山及び武漢の写真については，往路である可能性もあるが，南部粤漢線沿線のネガと同じかたまりの中に含まれていたので，復路と判断した。

43） 前掲「45年目の戦場写真・毒ガスは使われたか」の中に，従軍時の「撮影日誌」が映っており，1990年時点では別所の手元に保管されていたものと思われるが，現在は所在不明である。

44）「大陸縦断路を往く」（上）では10月２日に出発したとなっているが，前掲「「戦争のむごさ伝えたい」」及び前掲「私の略歴」（吉田保宛手紙）では，1944年９月から1945年５月まで従軍していたとされている。したがって出発は，『ある従軍カメラマンの証言』の「まえがき」の通り９月だと思われる。

45）「大陸縦断路を往く」（下）では12月７日に広東到着となっているが，前後の行程から考えると，「まえがき」の12月31日が正しいように思われる。

46） 前掲別所『ある従軍カメラマンの証言』「まえがき」

47） 前掲別所『ある従軍カメラマンの証言』「まえがき」

48） 前掲「座談会カメラマンは証言する」（43頁），前掲「「戦争のむごさ伝えたい」」，前掲「私の略歴」（吉田保宛手紙）

49） 前掲益井『本土空襲を阻止せよ！』223～225頁

50） 佐々木春隆『B29 基地を占領せよ―10個師団36万人を動員した桂林作戦の戦い』（光人社 NF 文庫　2008年）357頁

51） 前掲益井『本土空襲を阻止せよ！』225頁

52）「一号作戦計画」（昭和一九．三．一〇）によれば，「第五航空軍ハ地上作戦開始直前即チ四，五月ノ候四川省次テ西南支那ニ在ル敵空軍基地ニ対シ進攻作戦ヲ実施シ敵航空戦力ヲ撃滅スルニ努ム」（前掲『中国方面陸軍航空作戦』414頁）とされており，例えば1944年７月28日には桂林飛行場にて炎上撃破64機という戦果をあげたという（同488頁）。

53） 前掲益井『本土空襲を阻止せよ！』222頁

54） 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書30　一号作戦＜３＞広西の会戦』（朝雲新聞社 1969年）399頁

55） 吉見義明『毒ガス戦と日本軍』（岩波書店　2004年）185頁，229頁，なお吉見によれば，第２次衡陽攻撃（1944.7.11～21）では，「いわゆる致死性ガス以外の毒ガス攻撃を大規模に準備していた」という（228頁）。

56） 楊克林・曹紅編著『中国抗日戦争図誌　日本語版　下巻』（株式会社 IDS　1994年）945頁，紀学仁主編　村田忠禧訳『日本の化学戦―中国戦場における毒ガス作戦』（大月書店 1996年）284頁

57） 前掲佐々木『B29 基地を占領せよ』226頁

58） 前掲佐々木『B29 基地を占領せよ』161頁

59） 別所の写真には，「七星岩」「猫児岩」と書かれた洞窟の写真があるので，少なくとも二つは取材していた。前掲『ある従軍カメラマンの証言』では，洞窟内の死者の写真について，「桂林七星岩洞窟内にて」と書かれている（19～20頁）。

60） 前掲別所「大陸縦断路を往く」（下）

61）『読売報知』1945.1.18（「香港で廿四機屠る」），19（「香港広東にB24来襲」），23（「又も香港盲爆　華人死傷四千」），『朝日新聞』1945.1.19（「抑留所を盲爆　米機の鬼畜ぶり」，「香港広東にB24廿八機」），23（「四千余名死傷　敵，香港を盲爆」）

62）前掲小柳・石川『従軍カメラマンの戦争』219頁

63）別所の横浜空襲の写真は，前掲別所『ある従軍カメラマンの証言』に収録されているほか，NHKスペシャル取材班・山辺昌彦『東京大空襲―未公開写真は語る』（新潮社　2012年）にも収録されている。

64）前掲横田「がんじがらめの言論」61頁

65）これらの写真については，前掲井上ほか『アメリカ軍無差別爆撃の写真記録』及び前掲NHKスペシャル取材班・山辺『東京大空襲』を参照されたい。

66）山辺昌彦「東方社と国防写真隊との撮影による空襲被害記録写真の歴史的意義」（前掲井上ほか『アメリカ軍無差別爆撃の写真記録』）52頁

67）前掲山辺「東方社と国防写真隊との撮影による空襲被害記録写真の歴史的意義」57～61頁

68）石川光陽『痛恨の昭和グラフィック・レポート』岩波書店　1988年，石川光陽・森田写真事務所『東京大空襲の全記録グラフィック・レポート』岩波書店　1992年

69）前掲別所『ある従軍カメラマンの証言』50頁

70）前掲「座談会カメラマンは証言する」47頁

［付記］　本稿は，平成23～25年度科学研究費助成事業　学術研究助成基金助成金（基盤研究Ｃ）「戦争末期の国策報道写真資料の歴史学的研究―国防写真隊と東方社を中心に―」（課題番号23530853　代表公益財団法人政治経済研究所山辺昌彦）の研究成果の一部である。